

第1回 TFD 日台民間交流国際シンポジウム in KYOTO

歴史景観・街造り・民主人権

「京都市立芸術大学移転を機に“マイノリティ・まちづくり・民主と人権”を考える」

第一屆 TFD 台日民間交流國際研討會 in KYOTO

歴史景観、社區營造、民主人権

(主題：以京都市立藝術大學遷移為契機思考「少數族群」、「社區營造」與「民主人権」)

資料集 2

2015年11月

TFD・財団法人台湾民主基金会 (財團法人台灣民主基金會)

NPO 法人京都景観フォーラム (NPO 法人京都景観論壇)

1963年琉球・石垣島生まれ、南大東島、与那国島、沖縄島那覇で育つ。屋号は父方がアガタ、母方がマエハテロースンヤ。父親は台湾の基隆で生まれる。与那国島から台湾が見えた。那覇高校、早稲田大学政治経済学部卒業、同大学大学院経済学研究科修了。博士（経済学）。在ハガツニヤ（グアム）日本国総領事館と在パラオ日本国大使館の専門調査員、東海大学助教授を経て、現在、龍谷大学経済学部教授。単著として『琉球独立宣言—実現可能な5つの方法』（講談社文庫）、『琉球独立論』（バジリコ）、『琉球独立への道』（法律文化社）、『琉球独立』（Ryukyu 企画）、『琉球の「自治」』『沖縄島嶼経済史』（ともに藤原書店）、『ミクロネシア』（早稲田大学出版部）編著として『島嶼沖縄の内発的発展』（藤原書店）、『民際学の展開』『島嶼経済とコモンズ』（ともに晃洋書房）、『琉球列島の環境問題』（高文研）

1. 日米の植民地としての琉球

1972年の「日本復帰」は琉球が日本国に一部になったことを意味する。琉球は、形式上、「沖縄県」という日本の一自治体とされている。「復帰」前後、中華民国政府は琉球が日本の一部になることに強く反対した。

(1) 歴史的、政治的理由

1609年、島津藩の武力侵略を受けた琉球国は、同藩の間接統治下におかれた。1879年に日本政府は琉球国を滅亡させ、国王を東京に拉致し、「沖縄県」を設置した。

(2) 制度的理由

琉球にのみ適用される法制度や組織が存在している。沖縄振興特別措置法、内閣府沖縄担当部局（旧沖縄開発庁）、沖縄振興計画、沖縄科学技術大学院大学、沖縄振興開発金融公庫、金融特区、特別自由貿易地域、北部振興事業・島懇事業等。

(3) 軍事的理由

日本政府は、全国土の0.6%しかない琉球に在日米軍基地の74%を押し付け、県知事、名護市長、多くの琉球人の反対にもかかわらず辺野古新基地建設を強行している。

(4) 経済的理由

日本企業、日本人移住者による琉球の植民地経済が拡大している。本来得られたはずの莫大な経済利益が基地によって奪われた。

(5) 教育上の理由

1959年の宮森小学校への米軍機墜落（死者17人、負傷者121人）、1995年の米軍兵士による12歳少女の暴行、2004年の沖縄国際大学への米軍ヘリコプターの墜落等を中心とした米軍による数限りない事件事故、米軍機の騒音等を見ても、琉球の子どもたちは正常な環境の中で教育を受けているとはいえない。

2. 日米の国家暴力に抵抗するための琉球ナショナリズム

(1) 民族（Nation）としての琉球人

琉球人が先住民族であることは、次のIL0169号条約第1条の規定からも明らかである。

琉球新報社と沖縄テレビ放送（OTV）の2015年における意識調査：自己決定権の行使を求める人88%。2012年の琉球新報社の調査ではウチナーンチュや沖縄文化への誇りは90%。沖縄県による2012年の意識調査：基地の集中を「差別」であると感じている人は74%。

(2) 琉球ナショナリズムとは

日本政府は自国民である琉球人の生命を守らず、地位協定を改正しようとしなない。このような日本に対して琉球人は「沖縄差別」と批判するようになった。それは琉球人が自らを被差別者、抵抗の主体として自覚したことを意味する。

3. 独立論の系譜

(1) 太平洋諸島との連携

「復帰」後、経済開発の拠点として位置付けられたのが、平安座島のCTS（石油備蓄基地）であった。開発に反対する琉球弧の住民運動の人々は、同じくCTSの建設計画があったパラオの人々を琉球に招き、協力して反対運動を進めてきた。

(2) 国連、国際法を活用した脱植民地化

1962年2月1日、琉球立法院は「2.1決議」を採決し、国連憲章、植民地独立付与宣言に基づいて米軍統治を批判し、同決議を国連本部と全加盟国に送付した。1963年2月、タンガニーカ（現在タンザニア）で開催された第3回アジア・アフリカ諸国人民連帯大会は「4月28日を『琉球デー』として、国際的共同行事を行うよう、すべてのアジア・アフリカ人民に訴える」という決議を採択した。

4. 琉球は「日本固有の領土」か

(1) 「日本固有領土論」の陥穽

日本政府は琉球が自らの「固有の領土」であることを根拠にして、辺野古基地建設を強行し、オスプレイを配備した。領土権を保有する日本政府が琉球の現在や将来に対する決定権を持っているという論理である。

5. 琉球「国」によって琉球人の人権を守る

(1) 日本統治下で基地はなくなるのか

単独州になれば基地を撤去できるだろうか。日本の分権化が進んでも、安全保障、金融、経済政策等は中央政府が掌握することが前提とされており、日本の安全を理由にして琉球州に基地が押し付けられるだろう。

(2) 世界の脱植民地化運動

1945年に51カ国によって設立された国連には現在、193カ国が加盟し、国の数は約4倍に増えた。

(3) 独立後の経済発展

沖縄県は現在、2007年に国税として年間約2834億円の税金を日本政府に払っているが、独立すればそれは琉球のものになる。さらに沖縄県、市町村の地方税収入はそれぞれ約1040億円、約1364億円ある。独立後、約5238億円の資金は琉球の独自財源となる。

結びに代えて—独立による差別からの解放

- 琉球国を併合し、現在も米軍基地を琉球に押し付けている日本にとって植民地問題とは世界の他の国の問題ではなく、自国の問題である。琉球問題は、世界の脱植民地化過程の中で議論され、具体的な解決策が講じられなければならない。日米両政府、日本国民の多数派が琉球の過去、現在、将来を決めてきたが、これは国際法違反であり、琉球差別である。
- 世界の植民地の人々は大国による支配と差別から解放され、平和・生命・生活、基本的人権等を守るために独立の道を選択した。琉球にもその道は開かれている。
- 琉球人が自己決定権という権利を行使し、国家という自己防衛の装置を導入しなければ、さらに基地が強制され、差別され、戦場の島にされるという体制をつくりだしたのは日米両政府、日本人マジョリティである。
- 独立によって琉球人は現在の差別から解放される。

日本の被差別部落と崇仁地区の（概説）

1 一説には 6000 部落、300 百万人とも言われた時代もあった。しかし 1993 年(平成 5)総務庁地区概況調査によると、同和関係人口は 89 万 2751 人、同和地区人口は 215 万 8779 人と言われている。日本中(沖縄、北海道を除く)に分布している。(同和地区とは別名で主に政府や自治体関係者が使用する)

2 起源は各説ある。が基本的には中世からコミティーが存在したというのが有力である。身分と差別が不可分なものとして存在した。一説には仏教の穢れ意識や政治的な要素もあったとも言われている。それを近世になり、身分制に組み込まれた。(起源のあり様は一樣ではない、地区ごとに別の様相もある)被差別部落(清め、かわた、河原者)に直接つながらない、多くの賤民もいた。

3 近代に入り、1871(明治 4)年 8 月 28 日、明治政府により賤民廃止令が太政官布告として発布され、身分制はなくなり解放されるはずであった。単なる紙一枚では差別はなくなり、社会における差別は一段とたかまった。

一方でそれまでの皮革産業をはじめとする事が特権でなくなり、大資本に勝てなくなり、多くの権益が奪われた。その結果もあり、被差別部落に差別の上に貧困が重なり、多くの人々があえいだ。多くの人々が同情や保護をかんがえたが、1922(大正 11)年 3 月 3 日、部落民初めての自主的解放運動、「全国水平社」がここ京都で創立された。この時に出された「全国水平社創立宣言」は世界中のマイノリティー初の人権宣言と高く評価され、世界中のマイノリティーに今にも勇気を与えている。2105 年「ユネスコ世界記憶遺産登録」をめざしたが今回はおしくも国内申請からもれた。

4 崇仁地区はその日本の被差別部落を代表する三大部落の一つである。(他は大阪の西浜部落、神戸の番長部落)京都市内では最大の人口を抱えており、最大時には地区中に 10000 人が生活していた。戦後まもなく、地区内で起こった差別事件を契機に立ち上がり(差別は行政の中にこそ存在すると指摘し、日本中に波及した、国の政策にもなった)

教育や就職、住環境等を中心に事業が約 30 年程推移したがかならずしも事業展開が上手くいったとはいえず尚、課題を残している。最後の改良住宅(市営)の建設がされる状況に至り、少子、高齢化が進み、現在約 1600 人の人口の半分は高齢者である。しかし今回、京都市と地元の協議の中で「京都市立芸術大学」が地区内に移転すると決定し、後 9 年後にオープンし、まちは若い人々であふれるであろう事はまちがない。しかしなぜこの様に少子、高齢化したのか、研究し、総括する作業が残されている。崇仁地区は JR 京都の東に位置する、つまり世界に冠たる京の都の玄関口にあたる場所である。この地の文化、歴史、芸術、学芸を芸大とともに世界に向けて情報発信任務を我々は背負っている。

京都市におけるマイノリティのまちづくり

- 1 京都市における同和行政の歴史
 - (1) 歴史都市京都のアイデンティティ
 - (2) オールロマンス事件の虚構と歴史的意味
- 2 京都市同和行政の見直し
 - (1) 同和行政の成果と副作用
 - (2) 京都市における同和行政改革
- 3 マイノリティのまちづくり
 - (1) 崇仁のまちづくり
 - (2) 東九条対策
 - (3) まちづくりの課題と展望
- 4 差別を乗り越えるまちづくり
 - (1) 同和問題の解決の戦略・戦術
 - (2) 芸大移転を核とした崇仁のまちづくり
 - (3) 新たな東九条のまちづくり
 - (4) 差別を乗り越えるまちづくり

◇生まれ育ちは琉球列島・米国植民地！

私が生まれたのは 1951 年、琉球列島の久米島と言う小さな島。サンフランシスコ講和条約、そして日米安保条約が結ばれた年です。15 万人以上の住民が犠牲になった日米戦争・沖縄戦終結から 6 年後です。1 歳になった 1952 年、日本の独立と引き換えに米軍占領下におかれ「琉球政府」が発足（屈辱の日）

◇アイデンティティを奪われた教育

沖縄戦後、学校教育も整ってない時代、小学校入学とともに地域社会で使っている琉球語は禁止され、日本語教育を受ける。「方言禁止札」と書かれた木の板に穴を開け紐を吊るし、首から掛けさせられると言う屈辱と、ペナルティを与えられて日本語を学ばされた小学生時代。

地域では琉球語を使い琉球文化で生活の営みがあり、学校では日本語教育を受け、琉球社会では通貨がドルで米軍に統治された違和感だらけの社会。

◇米軍基地だらけの島から日本へ就職

米軍は「銃剣とブルドーザー」で土地を強奪し広大な軍事基地を建設。琉球の産業発展を阻み、学校を卒業して社会に出て行く子どもたちの就職先は無く、その多くが日本に出稼ぎで渡航。（今も変わらず）私も 1970 年、就職のため「琉球政府」発行のパスポートを携帯して入国した一人です。

私が日本人と出会ったのは 5～6 歳の頃にたった一度だけ。就職のためとは言え日本に行く事は希望よりも不安の方が大きかった。初めて親元から離れて「日本」にやって来た田舎の小さき者に待ち受けていたのは、「琉球人との同室は嫌だ」と言う会社の寮の先輩の「偏見と差別」でした。琉球人というだけで差別され、嫌味を言われ、無視される日々が続き、それはそれは大変なショックでしたが、職場には親切な日本人が沢山いてくれたのが救いでした。

1972 年 5 月 15 日、職場で突然流れて来た「沖縄県・日本復帰」のニュースは、喜びよりもやはり不安と戸惑いが大きく、差別が即無くなることはないと言われ「琉球人・ウチナーンチュ」の魂が騒いだ。

◇沖縄県人会を発足

1995 年 5 月、滋賀県で沖縄県人会を発足。初代会長から 20 年従事し今年 6 月辞任。まだ、あからさまな差別（結婚・就職差別）や眼差しが残っていたのがきっかけでした。

同年 9 月、3 人の米兵による少女暴行事件が起こり、反基地運動を軸に人権・平和活動を展開。

小・中・高等学校生・学校職員への琉球沖縄学習や、行政・市民団体・企業の平和セミナーに出かけて行った 20 年間。沖縄が大好きです！言ってくれる人は増えたけれど、消費する沖縄が好きで、日本人が琉球・沖縄に対する理解はさほど進んではいないと感じてしまう。

◇振り返ってみれば・・・

日本に潰された琉球国。日本人への同化政策でアイデンティティまで潰された琉球人たち。日米の戦争で地獄を歩かされ米軍占領下で苦しめられた 27 年間。今では日米の植民地と化し新基地建設を強権的に実行。反対派への日本政府の弾圧が異常である。「琉球沖縄」と日本との歴史は「差別との闘い」で、琉球人の生きる道は「独立」しかないのではと思う一人です。

◇琉球で生まれ育ち、琉球政府のパスポートを携帯して入国した私は、日本国籍「在日・琉球人」です。

東九条マダンに託す願い

朴 実（京都・東九条 CAN フォーラム代表）

◎東九条地域→社会的弱者・マイノリティが多く住むまち

京都で在日コリアンが最も多く居住する地域

被差別部落出身者が多く住む地域

障がい者も多く住む地域

単身または夫婦だけの高齢者世帯が多い

近年はコリアン以外の外国籍者も住むまち

◎民族・民衆文化運動

1980年代から地域で在日コリアンを中心とした民族・民衆文化運動が始まる→1986年ハンマダン（一つの広場という意味）結成

地域のまつりや、学校・職場での公演、特に松ノ木町40番地の夏祭り→抑圧・差別されてきた人間の解放

◎東九条マダン

資金、練習場、楽器、衣装など、何も無いところから出発

地域住民からの排除

実行委員会準備会結成（1992年）

第1回東九条マダン開催（1993年10月）

本年11月1日第23回東九条マダン開催

ワダサム

東九条マダンの出し物の一つに毎年「ワダサム」と呼ばれている和太鼓とサムルノリのセッションがある。当初は和太鼓とサムルノリは別々に演奏されていたが、第4回からセッションとなり、それ以後毎年一つの曲目として創作されている。この「ワダサム」こそ東九条マダンの趣旨を音で表現したものであり、地域の様々な立場の人々と共に生き、共に創るマダンを目指している。

「東九条マダン趣旨文」

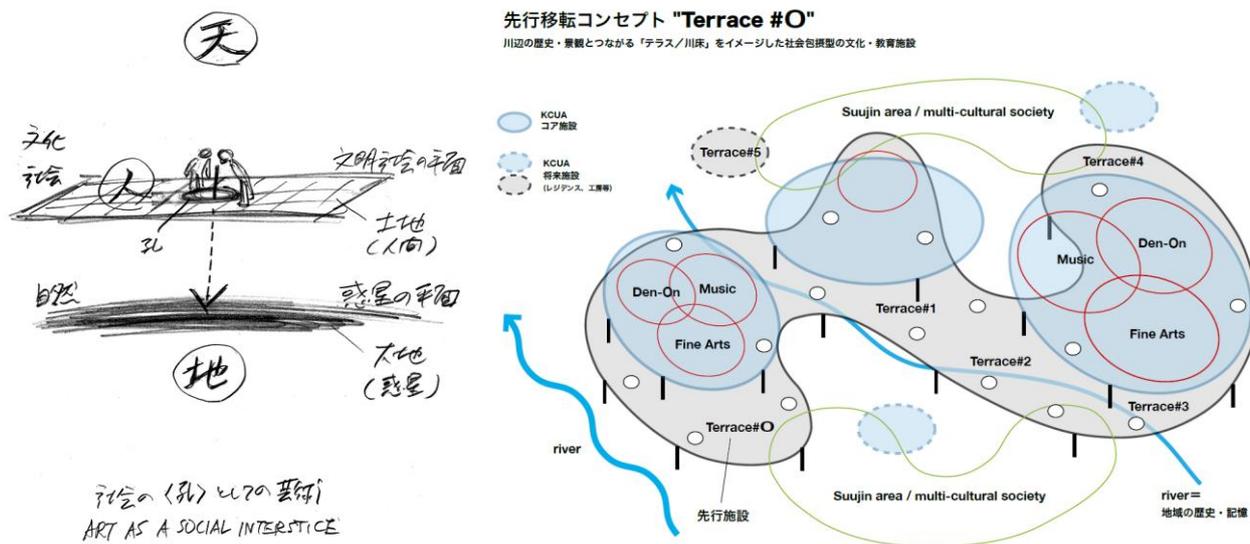
- 1、韓国・朝鮮人、日本人をはじめあらゆる民族の人々が、共に主体的にまつりに参加し、そのことを通じて、それぞれの自己解放と真の交流の場を作っていきたいと思います。
- 2、朝鮮半島にルーツをもち日本で暮らすすべての人々が、ひとつの踊りの輪に参加できるような、世代交流の場とし、そのことを通じて、子どもたちの生きた民族教育の場を作り出したいと思います。
- 3、朝鮮民族の願いである南北統一に寄与するため、生活の場である地域から、和解と統一につながるマダンを作っていきたいと思います。
- 4、東九条で生活するさまざまな人々が、共に生き、人と人が真に触れ合える、そのようなマダンにしたいと思います。

キャッチフレーズ「いこかつくろか、みんなのまつり」

社会の〈孔（あな）〉としての芸術

Art as a social interstice

井上明彦（美術家、京都市立芸術大学教員）



今日は、この地に移転してくる京都市立芸術大学の一員としてではなく、芸術（美術）にたずさわる私の個人的な立場から話をしたい。

私は、1923年の関東大震災で東京から西日本に逃れてきた難民の孫である。私が生まれ育った土地も家も借り物であり、土地や家を所有したことのない貧しい工場労働者の息子である。その立場からして、土地を所有し、奪い合い、追いやって差別しあう人間社会の原理にずっと違和感がある。おそらくこの原理は、狩猟採集文明から農耕文明への移行・発展とともに生じた。現代、人間が生きる文明社会は、ほとんど土地所有を基盤に成り立っている。「大地」は私的であれ公的であれ、人間に所有されることによって「土地」となる。土地は、経済的にも政治的にも文明社会の基盤となり、さまざまな支配体制およびそれと一体化した差別体制を支える価値観にも対応してきた。おそらく今世界で生じている凄惨な争いも、根本的には土地とその資源をめぐる覇権争いである。

人間と土地、人類と大地の関係について、自分が理想とする芸術の働きという視点から示したものが図1である。通常、人間は「土地」の上で、すなわち文明社会の価値秩序のなかで生きている。芸術は、そこに小さな孔を空けて、その下にある忘れられた「大地」をかいま見せる。大地とは土であり水であり風であり光であり、一言で言えば、人間以前も人間以後も存在する人間にはコントロール不可能なこの惑星の「自然」である。芸術は、私たちが支配する習慣化した価値と意味の秩序に孔を空け、天・地とつながる別の次元からこの世界を見る方法である。その意味では芸術作品とは実体でなく、「孔」、すなわち「機能する空虚」である。それは永続するのではなく、あちこちに口を開け、また閉じる小さな運動を繰り返す。この孔を空ける方法や思考は、芸術家のみに占有されるのではなく、広く人々に開放され、共有されねばならない。

今年春、崇仁地区で京都芸大の移転を先取りするように、日本や海外のアーティストが参加した"still moving"という展覧会が開かれた。それに出品した私たちのインスタレーション図3～15を例に話す。開催場所と作品の関係を図2に示す。黄色が京都芸大の移転予定地で、私たちの作品"Tracing Suujin"

は、旧崇仁小学校と KYOMO（平成の京町屋モデル住宅）に配された。

床に浮遊するグリッド（格子）は、小学校の建物の方向に対して傾いている。このグリッドは、KYOMOの敷地にあるグリッドをスケールを変えて平行移動したものである。KYOMOには以前住宅が建っており、河原町通の拡充と高瀬川の流路変更に伴い、撤去された。KYOMOの敷地のグリッドは、旧高瀬川の流れの方向に沿っている。周知のように、格子は平安京の条坊図（図8）に見られるように都を規定するきわめて人工的な秩序である。それが、このエリアでは運河である高瀬川の水の流れに沿って傾いているのだ。人工的な秩序が大地の傾きに沿って流れる水という自然によって向きを変えていることが興味深く、私たちはそれを厳密に東西方向に配された小学校の空間に挿入することで、人工と自然（水）の関係を際立たせようと考えた。教室の窓には半透明のスクリーンを張り、窓からの光景をおぼろげな光に還元し、遮断された外の音はマイクで拾ってコンピュータで変換して教室内に流した。教室の床には直径8センチの大きなガラス球を置いた。ガラス球は手でゆっくりころがすと、床の水平な面を求めて、あっちこっちへウロウロと予期せぬ動きを見せる。光を集め、人間の目には見えない水平性に応じて動くガラス球は、重力に身を委ねて流れる水という自然の象徴である。そのガラス球と同じ大きさの孔がスクリーンに空けられ、孔をのぞくと運動場の端を横切る高瀬川が見える。その流れこそ、床のグリッドの傾きを決めたものである。

もうひとつ忘れてならないことがあった。それはこの崇仁の地が、万人の平等を訴える「水平社宣言」が出された土地であるということだ。水平とは、「人間の土地」ではなく、「生きものの大地」から見たときの万物平等の思想である。この地に住む人々は、かつて「河原者」と呼ばれ、さげすまれた。しかし、「河原」とは、視点を変えれば、徴税という支配秩序から自由な「土地ならざる土地」であり、そこで生きる人々は自然を畏れ、人間の悲しみを知り、大地に近いさまざまな知恵と技術を身に付けていた。それは、「原住民」とよばれる人々に通じるものではないだろうか。私はその不安定な場所から自然支配を奢る近代文明の醜悪さをまなざす人々の視点に心から共感する。"Tracing Suujin"は、平安京以前の大地を流れる水とそのたもとで生きる人間と生きものに思いをはせる文字通りの空虚としてつくられた。（図16）

水は大地を流れる。人間が都市秩序をつくる時、最初にするのは水のコントロール、治水である。その上に耕地や宅地、事業地のような「土地」がつくられる。だが土地は、それを支える大地とともに、固定した絶対的なものではないことを、文明世界に安住する私たちは忘れがちである。それを思い出させるのは、人間の想像もコントロールもはるかに凌駕する大地の身震いであり、荒れ狂う天空である。それは、芸術が空ける小さな儂い孔ではなく、巨大な孔を人間世界に空ける。（図17）

地球誕生以来、大地は移動してきた。人類も移動してきた（図19、20）。それは今後も移動する。一億年後、大陸は図のように姿を変え、日本列島はアジアと一体化しているだろう。「移ろうこと」こそ宇宙における存在の真理であってみれば、人間と土地の所有関係を固定的に考えることは無意味であろう。人間は「土地」を地球とよばれるこの惑星に返すべきである。

私はまだ台湾を訪れたことがない。昨年、日本の西の端・与那国をおとずれ、海峡ごしに台湾を望んだ（図22）。国境線あたりが太陽の光で白く消し飛んでいた。大地には本来国境などないことを光が教えてくれた。

芸術がこの崇仁の地に息づき、既存の人間中心主義の価値観から自由なく孔>が生き生きと開くことで、国籍も文化の違いも、さらに生物種のちがいも越えた万物水平の新しい価値観が創造的に世界に発信されることを願う。それは自然への畏れとともにある。

TAYAL 部落單一部落到跨部落的工作模式～以尖石後山青年串聯工作為例 亞弼·達利 Yapit Tali (至善基金會 新竹工作站主任 泰雅族 至善基金會新竹工作站主任)

「タイヤル族の一部落が全体の活動モデルとなる～尖石後山青年連帯活動の事例を通じて」
ヤピ・タリ (至善基金会、新竹活動センター主任)

這是在敘述一個我自己的工作經驗，同時也在記錄部落族人的工作，如何藉由內在文化的力量到家族的連結擴散到跨部落甚至是到跨國家跨民族的工作連結。為何有這樣的開始～當然除了自身成長的經驗影響甚大，成長過程中大社會正在有巨大的改變，當時的台灣社會由國民大會推舉台灣總統，但台灣社會有一股民主的力量，希望由人民直選總統的浪潮，同時原住民族也正在面對原住民正名、還我土地等等的社會運動，這些運動的參與也增加涵養了我自己成為一個泰雅族後代的優越感以及對人權的敏感度！所以當自己選擇用社會工作作為服務學習切入部落工作的方式時就知道自己一定會回到部落裡面投入工作！

この報告は私自身の経験であり、部族のコミュニティ活動を記録しながら、内在する文化の力がどのように部族の家族的な団結に発展し、さらにはコミュニティを越えて、国全体の民族の団結にまで発展するかを報告するものです。

このような活動の背景には、私たちが体験した民主化が大きく影響していることは言うまでもありません。当時の台湾社会では国民大会が総統を選出していましたが、民主化によって、国民の直接投票によって総統を選出できるようになりました。同時に原住民族は民族的に正当な名前を取り戻す運動や祖先の土地を取り戻す社会運動を始めました。これらの運動に参加することで、私はタイヤル族の子孫であることの誇りを強くするとともに人権に対する感受性を養いました。そして職業としての社会活動の道を選び、コミュニティ活動の方法論を学び、村に戻って仕事を始めました。(この後、ヤピ・タリさんが台風被害からの復興まちづくりを支援する様子が説明されます)

GAGA 是一種約、也是一種規範，規範的內涵從大到傳統領域小至吃飯的禮節等等，而規範是重要的核心價值，更是支持泰雅族人與大自然生活互為依存的关系。從這個為核心的價值開始，然後在各個層面發展並學習之。例如：從認識民俗植物開始，從周邊田園常吃的野菜開始辨識、蕨類、樹種、藥用植物等等的認識……

GAGA とは一種の規範 食事のエチケットから伝統行事に至るまでの、タイヤル族と自然の相互依存的な関係を支える、重要で核心的な価値を持つ規範です

例えば民俗的な植物を識別することから始め、食用や薬用への利用を学び、植物と動物の関係（生態系）を学びます。

同時に、冬に身をつけ熟すと落ちるシナモン、それを食べるムササビ、野生ハト、キジなど、タイヤル族と植物や動物の種の間を学習します。

村の青年やハンターは、科学技術的な学習をしフィールドでの知識を学んだ後、自然の法則にいかに対応し、大自然の変わりゆく季節にいかに対応するべきかを知るでしょう。



